釈日本紀における韓国系固有名詞の声点について

朴美賢(釜山大学日本研究所)

『釈日本紀』は卜部兼方が父親の兼文の日本書紀の講演録と平安時代の注釈書を参考に完成した13世紀末の注釈書である。日本書紀講演(書紀講筵)は日本書紀編纂の翌年から985年まで公式的に7回にわたって行われており、漢文である本文を日本語で復元して読み上げる形式であった。教授である当時の博士や尚復の音読は声点も含めて「師説」として伝わり、釈日本紀は日本書紀講筵の完成本であると言われている。

釈日本紀の巻16から巻22は「秘訓」であり、この秘訓は日本書紀の使用字句に秘伝的な古訓や声点を記しているもので、中には古代韓国系固有名詞をも多数記載されている。日本書紀30巻にみられる韓国系固有名詞の大部分を網羅しており、古代韓国系固有名詞の訓法は釈日本紀によって成り立っていると行って過言ではない。また古代韓国系固有名詞には9割近く声点が加点されており、声点の研究資料における釈日本紀の位地は高いと言える。

日本書紀の声点については高山倫明、森博達、中村雅之の一連の研究により日本書紀の歌謡における音仮名は平安時代京都アクセントを反映しており、特に中国人(続守言、薩弘恪)の担当とする α 群(巻14～巻21、巻24～巻27、巻30)の原音声調の一致率が β 郡より高いことが明らかになっている。また鈴木豊(2018)は巻14～21(α I)は原表記を多く採用しているのに比し、巻24～27・30(α II)は原音声調とアクセントを考慮して表記を改めていると論じている。

釈日本紀における韓国系固有名詞の漢字音については尹幸舜(1996、1998)は日本呉音、日本漢音の他に古音を反映しているものが多数みられる複雑な様態であると論じている。しかし、韓国系固有名詞の声点と日本呉音、日本漢音との関連についてはまだ調査されておらず、また古写本との関連など声点に関する研究は十分とは言えない状況である。

このような背景から、本発表では釈日本紀の秘訓における韓国系固有名詞をとりあげ、概要を紹介するとともに古写本との関連、中国中古音および日本呉音・漢音との対応について論じる。

釈日本紀の声点は圏点と線点の二種類がみられ、韓国系固有名詞の圏点は延べ語数1451点、使用漢字種類は556字であり、線点は延べ語数527点、使用漢字種類は195字で圏点が多数を占めている。圏点を対象に中国中古音との対応¹をみると、韓国系固有名詞に使用されている中国中古音(原音声調)は平声43%、上点14%、去点17%、入声25%である。これは平声が上点と去点の合計を上回る一般的な漢字の割合に準じている。

一方、韓国系固有名詞に加点されている声点は平声(54%)、上声(8%)、去声(12%)、入声(23%)で平声が半数を占めている。これは釈日本紀の声点が原音声調をそのまま反映したものではなく、韓国系固有名詞を平声(低平調)に発話したことを意味する。このような平声点加点傾向は古写本と同様な結果であり、韓国系固有名詞の声点の特徴とも言える

また岩崎本、前田本、凶書寮本などの古写本と声点の一致率を調べると、完全一致および部分一致を合わせると90%以上であることから釈日本紀における韓国固有名詞の声点は古写本の量的不足を補う資料として利用価値があると言える。

¹ 韓国系固有名詞に複数の声点が見えるもの、中国中古音に複数の声調のものは対象外にした。